### 2011年7月16日(土)

京都精華大学国際マンガ研究センター+京都精華大学大学院マンガ研究科+科学研究 費補助金「女性 MANGA 研究」共催公開研究会

『女性マンガ』という視座 マンガ研究科の5つのタマゴたち 報告資料

腐女子の内部規範——外部との関係から現在のつながりへ 京都精華大学大学院 マンガ研究科 修士課程 マンガ専攻 鈴木翠

#### 概要

腐女子のやおい活動を巡る内外の関係は、00年代中盤から変化しており、現在ではジェンダー論やマンガ論をはじめ、様々な分野で言説や研究の対象となっている。本発表では自身もやおい活動を行っている、いわゆる「腐女子」と言われる立場の観点から、腐女子の内部規範とそれの持つ役割、近年の外部との緊張とその要因を述べる。目次としては序論を挟み、1に内部規範の成り立ち・意味を、2に外部との折衝、3に可視化の要因をあげ、結論で内部規範が現在も有用なものであるかを考察する。

なお、本論における腐女子とは特定の活動傾向をもつ人を指し、性別による選別は 考慮していない。しかし現在に至るまで女性の占める割合が非常に高く、女性による マンガ受容・ファン活動の一例として扱うのは妥当であると思われる。

#### 序論

二次創作という行為は同人誌即売会等を通じ、同人誌というメディアを介して規模を大きくした。近年では大きな市場が形成され、活動範囲も同人誌のみならず、様々な媒体や場所に広がっている。その中で「やおい」の占める割合は決して少なくないと思われる。特に女性向けをうたうイベント・即売会においては、やおい作品が圧倒的多数を占めているといえるのではないか。また一般書店でやおい作品アンソロジー

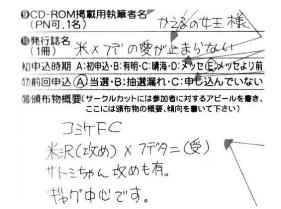


図 1 コミックマーケット準備会『コミックマーケット 80 参加申込書 参加のご案内』 p. 19 2010 年 有限会社コミケット が取り扱われていること、あるいはウェブを 介することなどで、近年ではやおいという 表現・活動に接することが容易になってい る。また、イベント参加申込書の例文にやお い CP (カップリング) の表記が利用されて いるなど [図 1]、やおい活動に使用される 言葉が、腐女子だけでなくイベント参加者に とっての共通知識に含まれていることが分か る。このような事から、女オタク=腐女子、 あるいは女性の二次創作=やおい、という正 確でない印象を持たれることも起こりうるだ ろう。いずれにせよ二次創作活動を語る場合、 やおい・腐女子は重要な要素である。また、読者という立場に限定すれば、その範囲は特定の愛好者のみならない、広い読者層を持っているのではないか。では、より積極的にやおい活動・作品に接する腐女子には、一般的な読者と区分される特性があるのか。腐女子達は同じ嗜好の者同士が集まることが多く、外部からは分かりづらい、独自の規範を示すことがある。それはどのような環境で成り立つのか。

### 1. 内部規範の成り立ち・意味

溝口によると腐女子は作家・読者間の平等意識と共感から、コミュニティへの帰属意識が高く、読者にとって作品の受容と書き手との交流を図ることは同一線上におくことが可能であるとしている¹。基本的には商業出版を活動範囲としないやおいの場合、このような傾向は特に顕著といえよう。しかし金田によると作品の売り上げが多く、多数の読者を得られる個人・サークルは「大手」と呼ばれ、同じ作品を原作とする他者に対し高い影響力を持つとしている²。好きな作家への尊敬、読者として作品を求めることは一般的なファンの行動と変わらないといえる。また読者・閲覧者の数が周囲の描き手に強い影響を持つことは、媒体が同人誌からウェブに移行しても同様である。

では彼らに対する尊敬から、大手作家は「第二の原作者」と見なされているのだろうか。個々のやおい作品のオリジナリティの尊重として、他の作品のトレースや無断転載に対しては厳しい目を向けられることは多い。反面でキャラの設定や CP などは大手のサークル・書き手の設定がしばしば広く共有されている。時には原作の設定より重視され、多くの腐女子に認められることもある。特定の CP が人気を博し、同じ原作を好む腐女子達、あるいは二次創作活動の中での「王道」となるのは、もちろん原作そのものの影響が大きい。しかし影響力のある大手サークル・書き手の作品という存在も大きな影響力を持ちうるものである。また書き手が自身のオリジナリティをキャラや CP 設定の独自性で誇示するよりも、自分の好み描く CP がより多くの書き手に描かれることを望む傾向が強いのではないかと感じる。

このような嗜好に基づいた平等意識から、集団としての結束とは異なる傾向での内 部規範の強さがもたらされたといえる。それは、同様の趣味を持たない・理解を示さ

<sup>1 「</sup>人気のあるプロ作家であっても、自分の『スペース』と呼ばれるブースで自ら売り子を務めることが当たり前で、なおかつ、例えばブースにいる 3 人の女性のうち、どれが作家本人で、どれが『売り子』さん――アシスタントや手伝いの友だち――かが見ただけではっきりとわかることのほうが少ない……『どの人かわからない』状態であることは、むしろ、『自分もプロ作家も、このヤオイ・コミュニティに等しく帰属するメンバーなのだ』という意識を強化することになる。そしてその仲間意識が、実際には会ったことのない作家へも拡大適用される。」(溝口彰子 [2010] p. 147)

<sup>2 「『</sup>大手』とは、コミックマーケットで行列を形成しやすい外周に配置されるような、人気が高く同人誌が売れているサークルのことである。」(金田淳子 [2007] p. 181)「インタビューからわかるように、『大手』はそれ以外のサークルにとっては近づきがたいほどの存在であり、他のサークルに対して暗に影響力を及ぼす力があると思われている。」(同 [2007] p. 182)

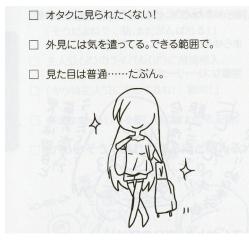


図 2 腐れ女子の会『腐女子取扱説明書』 p. 24 2009 年 コトブキヤ

ない可能性のある他人のいる場所での、腐女子としての自己主張の過剰とも取られうる自制である [図 2]。二次創作全体の傾向ではあるが、原作者に対してはより慎重な態度を推奨している。やおい作品を見せることは元より、服装や言動で「オタク」とも認識されないように、自身を外部に溶け込ませようとするなど、腐女子としての自身の存在を気づかれることをも嫌悪する傾向がある。やおい活動を行う作者・読者の区分なくこのような内部規範は尊重され、結果としてやおい作品全般と、外部との「衝突」を避ける機能を持っていたのではないか。しかし活動媒体が多様

化し、より外部からの視線が増えている現状において、腐女子の内部規範がどのような意味を持つのだろうか。

### 2. 外部との折衝

やおいに限らず二次創作全体にいえるのは、これほど大きな市場を持つにも関わらず、未だ著作権のグレーゾーンに位置しているということである。同人作家が企業から訴訟を受けたケースはいくつかある<sup>3</sup>。作品の内容や頒布範囲によっては、ただのファン活動として見なされない可能性も含まれているといえるだろう。特にウェブを介することで、作品の頒布範囲は書き手の意図し得ないものとなった。意図的に原作者の側に近づくことを忌避するのは、やおいを描く腐女子にとっての自衛手段の一つとも言えるだろう。

また、マンガに対する表現規制は二次創作活動に影響を持ちうるとして高い関心を持たれている。特に腐女子達が大きな関心を寄せたのは、昨年末に東京都議会で可決された東京都青少年健全育成条例の改正に対する問題である<sup>4</sup>。規制対象に BL 等「女性向け」の性描写も含まれる可能性の認識が広まったことから、多くの腐女子に自身も無関係ではないと実感させたことが一因であろう。しかし、腐女子のこれらへの問題意識はまだ完全に浸透していると言いがたいのか、イベントを開催する企業側から

<sup>3 99</sup>年1月ポケモン同人誌事件:「ポケットモンスター」の同人誌の作者が著作権法違反で任天堂より告訴、逮捕される。06年8月「ドラえもん最終回」同人誌事件:ネット上で流れていた「ドラえもん最終回」を元に描かれた同人誌の作者に対し、小学館から「重大な著作権侵害にあたる」と警告を受ける。参考:コミックマーケット準備会編『コミックマーケット 30's ファイル』有限会社コミケット [2005]

<sup>4 2010</sup>年2月、条例の改正案が東京都議会に提出される。一旦は否決されるが、再度修正されたものが、同年12月に可決されている。参考:赤ブーブー通信社編『R18 読本 一緒に考えよう!』有限会社ケイ・コーポレーション [2010]



図3 赤ブーブー通信社編『R18 読本 一緒 に考えよう!』p.3 2010年 有限会社ケ イ・コーポレーション 漫画:的井けるな

の、作品制作や頒布に対する意識を高めようとする啓発が現在も積極的に行われている [図 3]。性描写を必ずしもそれ自体を目的として描くとばかりはいえず、作品の巧拙や絵柄にも一定の基準が存在しないやおいにとって、一括されたゾーニングの基準を明確に打ち出すことは困難である。特にウェブでは、作品のゾーニング自体もユーザー各自の良心によって成り立っているといえる。また書き味のものと見なされていることから、印刷会社・企業からの作品に対する指摘はごく限定的な部分に留められていることが多い。最終的には制作・流通まで含めて作品に対する責任は、個々の腐女子に帰せられることになる。

このようなことから、同様の事態は腐女子が話題になった 00 年代後半より以前から、コミックマーケット等では事あるごとに、特に男性向けの性描写を取り扱う同人誌の書

き手達から関心を寄せられていた<sup>5</sup>。腐女子達への問題意識のタイムラグが起こってしまったのは、やおい活動の内部規範に依るところが大きいのではないか。腐女子が外部にやおい活動の存在を知られることに非常に消極的で、そのための内部規範が形成されているのは先に述べた。この基底には同じ嗜好の者以外に知られることへの嫌悪があるが、自重を促すような内部規範を用いることで外部からの批判を軽減していたとも言えるだろう。しかし腐女子を取り巻く環境は変わりつつあり、内部規範の遵守のみで外部との折り合いをつける事に対し、腐女子の側からも疑問を向ける声が見られ始めてもいる<sup>6</sup>。またBL・やおいへの嗜好に対する自虐性そのものが、同性愛者という別のマイノリティへの差別的な視線に対する抗議を受け付けなくしてしまうの

<sup>5 「</sup>今回 10月2日に開催予定だった千葉幕張メッセでのイベントが、千葉県青少年健全育成条例の改正等の絡みで中止になったこと……この特集で今回の自主規制だけではなく、規制そのものについても一人一人が考えてもらえば幸いです。」(コミックマーケット準備会 [1997] p. 1)

<sup>6 「</sup>二次創作は身内が作ったルールでがちがちに縛り付けるのではなく、各々が判断を下すべきではないかと私は考えます。同人の基本はセルフプロデュースなのですから。もちろん活動する上で他者に気遣うことは大切ですが、判断基準を非腐女子に合わせるのは安易だと思います。非腐女子に寄り添うために存在する今のマナーは思いやりというより単なる保身に見えます。それに非腐女子がやおいを嫌う感覚のうち、嫌悪や偏見などを無批判に受け入れるのは、腐女子もやおいを貶めていることにはならないでしょうか。」(坂取キヒロ[2009]p. 1343)

ではないかという石田仁の指摘もある<sup>7</sup>。内部規範の力から腐女子にとって関心が薄くなってしまいがちだった外部との問題にも、目を向ける動きが現れている。

# 3. 可視化の要因

このようなやおいを取り巻く状況は、外部に自分達の嗜好が知られるのを嫌う腐女子達にとっては、必ずしも好ましい状況ではないのかも知れない。ではなぜ、外部と積極的な交流を持とうとしない腐女子の存在が取り上げられるようになったのか。海外にもやおい活動が広がっているなど、腐女子という存在の広範囲化・グローバル化が一つの要因にあげられるだろう。もう一つに、やおい活動を行う媒体にウェブの利用が進んだことが考えられる。ここではそれを主に取り上げて行きたい。

インターネット環境の普及は情報伝達と交流に大きな影響を与え、腐女子の存在・行動をより広い層に知られる一因になったのではないか。90年代までのやおい活動は、実際に同人誌即売会や専門書店といった特定の場所に、実際に足を運ぶことで成り立っていたといえる。しかしウェブサイトでは場所や時間によらず作品を広い範囲にむけて発信することや、腐女子間の交流をより容易なものとした。表現方法や使用媒体によって利用者層に違いはあるが、いずれの場所でもやおい活動は盛んに行われている。特にウェブと同人誌との併用は一般化しており、手軽に情報の伝達ができるウェブと、実際に人と接することができる同人誌即売会を使い分けていることも考えられる。またpixiv<sup>8</sup>のような画像投稿サイトでは自作の展示だけではなく、相手の作品の評価などでの自己主張を行うことも可能にしている。例えば閲覧者が気に入った作品をブックマークして自身のプロフィールページに表示する機能は、必ずしも自分の作品を必要とせず、他者の作品の選別で自身の嗜好を提示させる使い方もできるだろう。

このような機能の発展・活用は、従来の創作活動以外の形で自身が腐女子であると他者に認識させることを可能にしたのではないか。またやおい活動を生活に合わせて調節できること、特別な技術の習得を超えての自己表現ができることは、従来では可視化できなかった層のやおいの嗜好・活動を外部に認識させることに繋がったのではないか。このことは、やおい活動だけでない腐女子全般の人数・活動が大規模化したという認識にも繋がっているのではないか。

このような要因からやおい・腐女子に外部から向けられる認識には、メディアでの 取り上げ方も含めて変化が現れたといえる。しかし、これによってやおい活動自体に

<sup>7 「</sup>つまり、腐女子の使用する『ホモ(ほも)』は、『[リアル] ホモ(ゲイ)』と呼ばれる事象に語源があり、また『[リアル] ホモ(ゲイ)』を物語の理解可能性の担保にしている。このため腐女子の『ホモ(ほも)』は『[リアル] ホモ(ゲイ)』をすでに・つねに参照していることになる。『やおい/BLはファンタジー、フィクションだから』無関係とする主張は誤りであろう。」(石田仁 [2007] p. 116)

<sup>8</sup> イラストの投稿、閲覧に特化したソーシャル・ネットワーキング・サービス。2007 年 9 月 10 日開始。考案・設立はプログラマの上谷隆宏。当初は上谷個人による運営だったが、利用者の増加から同年10 月 1 日よりクルーク株式会社(現・ピクシブ株式会社)の運営となる。

何らかの変化は起きたのだろうか。現在でも同人誌即売会には多数の腐女子が集まっており、原作の種類や CP も多岐に渡っている。またすでに日常生活に根ざしているウェブがやおい活動にのみ使用されなくなることは、今後も起こりえないだろうと思われる。少なくとも、外部の視線を受けたことでの、やおい活動の萎縮という傾向を私は感じたことはない。ここでは、新しい媒体や表現方法でやおい活動が広がりを見せる可能性を指摘したいと思う。



図 4 同人誌・BL ゲーム・乙女ゲームダウンロードショップ Girls Maniax URL: http://www.dlsite.com/girls/ (2011/7/5 時点)

何えば作品の販売形式という点ではやおい作品はまだ少ないものの、同人誌全般には電子書籍という形式も広まりつつある [図 4]。同人誌の通信販売そのものはウェブが普及する以前からすでにサークルや作家個人の手で、あるいは雑誌や専門書店を通じて行われていた。作品の受け取りに手間取らない点、手に入れた作品がかさばらない点は電子書籍のメリットとなりうる要素といえる。閲覧・販売形式で外部との区分を行っていること、作品を通じて読み手からもアプローチを可能とすることはやおい活動に欠かせないシステムである。従来のメリットに加えこれらの点

が考慮されていると腐女子達によって認識がなされた時、電子書籍のような新しいメディアで、やおい活動が普及する可能性があるのではないか。

## 結論

やおい作品は主に女性が描いてきたものである。私的で無害な「女子供の文化」とされていたゆえに社会問題の俎上に上げられにくく、確固たる規範を必要としないまま発展を続けてきたとも言えるだろう。それは外部との摩擦を各々の内部規範で守ってきた結果でもある。また二次創作活動が未だ確固たる制度の枠組みにはまっていないことに、やおい活動の内部規範が影響をもたらしている一面があるともいえないか。そしてこれは、二次創作活動がより広い世界との接点を持つに至っていくと思われる今後も、個々の腐女子にとっては、一定の必要性を持ち続けるものであろうと予測する。しかし既にやおい活動は可視化されつつあり、外部との接触を避け続けることは不可能といえる。そのような現状において、今後も自省による内部規範のみで外部に対して、やおい活動の立ち位置を認識させようとすることは困難であると思われる。

## 参考文献

- 赤ブーブー通信社編『R18 読本 一緒に考えよう!』有限会社ケイ・コーポレーション、 2010 年
- 石田仁「『ほっといてください』という表明をめぐって――やおい/ BL の自律性と表象の横暴」『ユリイカ 総特集 BL スタディーズ』青土社、第39巻第16号、2007年、pp. 114-123
- 金田淳子「マンガ同人誌――解釈共同体のポリティクス」佐藤健二・吉見俊哉 [編] 『文 化の社会学』有斐閣、2007年、pp. 163-190
- 腐れ女子の会『腐女子取扱説明書』コトブキヤ、2009年
- コミックマーケット準備会編『コミックマーケット 30's ファイル』有限会社コミケット、 2005 年
- \_\_\_\_\_\_『COMIKET PRESS 総集編1』有限会社コミケット、1997 年 坂取キヒロ「腐女子の過剰な自重はやおいを衰退させるのではないか」コミックマーケット準備会『コミックマーケット 77 カタログ』有限会社コミケット、2009 年、pp. 1341-1344
- 溝口彰子「反映/投影論から生産的フォーラムとしてのジャンルへ―ヤオイ考察からの提言」ジャクリーヌ・ベルント [編]『世界のコミックスとコミックスの世界 ── グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』、pp. 141-163、URL: http://imrc.jp/lecture/2009/12/comics-in-the-world.html(2011/7/15 現在)